

種生物学会 News Letter

No.5 (1987.5.31)

「種生物学会」発足する

さる2月6—8日の3日間にわたり福井県芦原研修会館において開催された第18回種生物学シンポジウム後の総会において、永年「種生物学研究会」として活動してきた当会は、「種生物学会」とその名称を改め組織の上でも若干の改変を行なって活動することになりました。こうした「学会」の体制に改めることについては、ここ2・3年にわたる幹事会での慎重な議論を経た上で客観情勢からみて「研究会」から「学会」へ移行すべき時期にきたと判断されたからです。以下に「学会」へ移行することの必要性とメリットについて改めて述べておきたいと思います。

- (1) 1986年より従来の「種生物学シンポジウム」記録集としての「種生物学研究」を廃止し、新たに英文の国際誌“Plant Species Biology”を発刊したこと。これによって会員の範囲も日本国内より他の諸外国へと広がり、会員へのサービスの範囲も必然的に拡大したこと。
- (2) 国内会員の数が460名に達し、いくつかの植物学関連の学会の規模を上まわり、対外的には「学会」としての対応を迫られるに至っていること。
- (3) 文部省の学術刊行物としての出版助成金の交付や、郵政省の学術刊行物の指定を受けるためには、「学会」の呼称が必要であること。また、日本学術会議の登録団体となることの必要性など、会員の将来の権利を確保するためにも改称が重要であると判断されたこと。
- (4) 大学研究機関以外の会員の方の権利を保証する必要があること(特に小・中・高校に勤務されている会員の方々にとって「研究会」では出張許可が得にくい)。
- (5) 何よりも本会員による研究活動が、日本における

この分野の研究の中核的位置を占めるようになりつつあること。

呼称の改称と併せて行った会則等の主な改正点は下記の通りです。

- a. 本会の名称を「種生物学会」とする。
- b. 会長は会員による公選制で選出する。
- c. 編集委員会の位置づけを明確にする。

なお新会則は本 news letter の5頁を御参照下さい。

1987年度総会の報告

1987年度種生物研究会総会は1987年2月8日に福井県芦原研修会館に於て行われました。上記のように本総会において本会の会則ならびに名称の改正が決議されました。その他総会にて報告・承認・議決された事項は次のとおりです。

1. 会長の選出

今回の改正にともない会長選挙が総会において行われました。総会出席者全員による無記名投票の結果、下記のように河野昭一氏(京大・理学部)が会長(任期2年)に選出されました。次回からの会長選挙は、会員全員による郵送投票となる予定です。

河野 昭一	55票
堀田 満	9票
阪本 寧男	6票
小林 央往	2票
無効	2票

2. 役員の改選

本会会則に基づき任期満了にともない幹事・会計監査等の本会役員の改選が行われ下記の方々が選出されました。

幹事

伊藤 元己 (京大・理)
井上 健 (秋草学園短大)
大原 雅 (北大・環境科学)
小林 央往 (京大・農)
阪本 寧男 (京大・農)
鈴木 和雄 (都立大・理)
寺井 謙次 (秋田大・教育)
野口 順子 (京大・理)
萩原 信介 (科博・自然教育園)
堀田 満 (京大・教養)
堀 良通 (茨城大・理)
村松 幹夫 (岡山大・農)
森田 竜義 (新潟大・教育)
矢原 徹一 (東大・理)

以上13名に会長の河野昭一を加え計14名で幹事会を構成します。この中から庶務幹事に伊藤元己、会計幹事に野口順子、英文誌 (Plant Species Biology) 編集幹事に河野昭一、和文誌編集幹事に矢原徹一が選出されました。

会計監査

植田 邦彦 (大阪府立大・総合科学)
河原 太八 (京大・農)

上記2名が新会計監査として選出されました。

3. 昭和61年度収支決算報告

(S. 61. 4. 1～S. 61. 12. 31)

収 入 の 部	
科 目	金 額
会 費	1,254,570
バックナンバー売上金	754,765
預 金 利 子	30,014
小 計	2,039,349
前 年 度 繰 越 高	1,205,800
合 計	3,245,149

支 出 の 部	
科 目	金 額
印 刷 費	1,973,850
払 込 手 数 料	1,590
通 信 費	235,210
事 務 費	24,035
編 集 諸 経 費	128,240
雑 費	9,223
小 計	2,372,148
次 年 度 繰 越 高	873,001
合 計	3,245,149

上記の収支決算書と内訳明細表・預金通帳・証票類を照合した結果、昭和61年度の会計報告(決算報告)を適正と認めます。

昭和62年1月17日

会計監査委員

山口 裕文
林 一彦

4. 昭和62年度予算案

収 入 の 部	
科 目	金 額
会 費	3,096,500
62 年 度 分	1,980,000
未 納 分	1,116,500
小 計	3,096,500
前 年 度 繰 越 分	873,001
総 計	3,969,501

支 出 の 部	
科 目	金 額
印 刷 費	2,735,000
Plant Species Biology (2回)	2,400,000
種生物学研究 (1回)	300,000
ニュースレター (1回)	35,000
通 信 費	445,000
編 集 諸 経 費	210,000
事 務 費	100,000
事 務 補 助 謝 金	100,000
予 備 費	50,000
小 計	3,640,000
次 年 度 繰 越 高	329,501
総 計	3,969,501

支 出 の 部	
科 目	金 額
会 場 費	23,500
暖 房 費	38,000
税 金	32,980
懇 親 会 費	341,190
宿 泊 ・ 食 費	745,100
演 者 旅 費	170,620
コ ピ ー 代	19,232
お菓子・酒・コーヒー代	52,700
事 務 費	6,645
小 計	1,429,967
次 回 繰 越 高	21,633
合 計	1,451,600

第18回種生物学シンポジウム会計報告 (野口順子)

第18回種生物学シンポジウムにおける収入・支出の内訳は以下の通りです。残金は次回のシンポジウムの運営費として繰越します。

収 入 の 部	
科 目	金 額
参 加 費 (一般55人×4000円) (学生52人×2000円)	324,000
懇 親 会 費 (一般45人×5000円) (学生45人×3500円)	382,500
宿泊・食費	745,100
小 計	1,451,600
合 計	1,451,600

Plant Species Biology 編集委員会からのお知らせ

(河野照一)

現在、Plant Species Biology は Vol. 1 の No. 2 を編集集中です。皆様のお手元には6月の上旬にはお届け出来るものと思います。また、Vol. 2 は発刊の遅れを取り戻すために No. 1 と No. 2 を合本にして150ページほどで出版する予定です。この号では、特集として先日のシンポジウムでとりあげたテンナンショウの生物学を予定しておりますが、一般の投稿原稿も掲載予定ですので、会員各位におかれましては、原著論文・総説・短報などをふるってご投稿いただきたいと思います。

編集委員会では Plant Species Biology の Series Article として “Life History Flora of Japan” と “Pollination Biology of Japanese Plants” を掲載していく予定です。特に、“Life History Flora of Japan” では、日本産植物の生活史の全体像を浮き彫りにするような論文をシリーズとして掲載することを意図しております。各々の種の地理的 (分布図を付す)、生態的分布を出きる限り正確に記録するのと併せて、生活史の全体を扱ったイラストを含み、繁殖システム (交配並びに送粉機構を含む) のさまざまな

局面、繁殖体の散布や休眠の機構、動物との相互適応関係など、生活史の全貌が網羅された論文が歓迎されます。なお、このシリーズへの投稿ご希望の方は編集委員長（河野昭一）までご連絡下さい。英国の Biological Flora にならって、分布図、生活史のイラストなどは、シリーズ全体として統一を計りたいと考えております。

また本年度よりフロッピーディスクからの版組みを採用しております。ワードプロセッサを使用して投稿原稿を準備される場合はできる限り原稿が入力されたディスクを同封して下さい。利用可能なソフトは Word Star または Word Star 2000 J (OS は MS-DOS, CP/M いずれでも可。ディスケットは 8 インチ 2D, 5 インチ 2HD, 2DD, 2D, 3 インチ 2HD, 2DD) です。ただし他のソフトでもテキスト形式に出力されていれば使用可能です。原稿入力にあたっては、右ざろえはせず、reference はインテンドせず棒打ちにして下さい。投稿にあたっては使用機種、OS、プログラム名を明記し、必ず活字指定をした打出し原稿を添えて下さい。

第 4 回国際植物バイオシステマティックス・シンポジウムについて (河野昭一)

前回のニュースレターでお知らせしたように、第 4 回 IOPB 国際シンポジウムが日本で開催される予定です。その後の経過ですが、日本雑草学会が新たに主催団体として参加して頂くことが決定しました。以下に今回のシンポジウムについての計画を紹介します。

1. 主 催 日本雑草学会
日本植物分類学会
種生物学会
2. 後 援 日本学術会議（希望）
3. 開催時 昭和64年7月10日～14日（5日間）
(予定)
4. 開催場 京都市
5. 会議の性格と目的

この会議は、植物の種生物学およびバイオシステマティックス（種分類学）に関連する進化学的研究の成果を発表・討論するため、3年ごとに開催される国際会

議である。

現代の種生物学並びにバイオシステマティックスとよばれる領域の研究は、植物の種の類縁関係の解析や種分化機構を解明するために、分子レベル、染色体レベルの情報から集団構成個体の形態的、生理的並びに遺伝学的特性、集団の個体群統計学的 (demography) 並びに遺伝学的特性に関する情報や種の保有する生物学特性、昆虫を含む動物や菌類などとの相互適応機構の解明を試みる極めて多岐にわたる情報の総合的学問領域として、生物科学の中で極めて重要な位置を占めている。また、遺伝育種学、雑草学、生態学など隣接した基礎並びに応用分野の研究とも関わりが深い。

従って、この分野の研究は、極めて広汎な問題を包含しており、上述した植物学的現象に関する個別的研究のみならず、植物の系統・類縁関係の解析、種の進化機構の解明などの進化学的研究、さらにはまた究極的には植物における遺伝資源の全貌を明らかにするなど、農学・薬学など応用分野に対する貢献も大きく、その意味でも、将来にわたり会議の果すべき役割は大きい。

6. 日本開催の経緯と意義

第 1 回の IOPB 国際シンポジウムは、1960年、カナダ・モントリオール市で開催されたが、当時はまさに染色体レベルを中心とする新しい情報が古典的な植物系統分類学的研究に大量に取り入れられ始めた時期であった。その後、この分野の研究の著しい進展にもかかわらず学会活動はやや長い空白の時期があったが、1983年 IOPB 会長にカナダ・マギル大学の W. F. Grant 教授が就任して以来、3年ごとの定期的開催が確保され今日に到っている。

1960年、モントリオール市における国際シンポジウムの際には日本からの参加者は僅か3名であったが、1970年代に入って日本国内においても種生物研究会（現在種生物学会、会員数 460 名）が発足して以来、研究者人口も着実に増加し、1983年カナダ・モントリオール市における第 2 回国際シンポジウム、1986年スイス・チューリッヒ市における第 3 回国際シンポジウムにおいては10名以上の参加者を送るのみならず、シンポジウムの招待講演者としても招請を受け講演・発表を行い、これまでのわが国の研究活動が高く評価さ

れていた。このような状況下で、1986年7月スイス・チューリッヒ市で開催された第3回国際シンポジウムの際に開かれた常任理事会と総会において満場一致の決定をもって、次回第4回シンポジウムは1989年に日本で開催されることが正式に決定された。本年1986年には、この分野の新しい国際誌として Plant Species Biology が種生物学会より刊行され、ここ10数年以来の急速な研究者人口の増加もあって、若手研究者を中心にわが国の研究者が世界的にみても中心的役割を果たすようになりつつある。このような時期に日本において国際シンポジウムを行うことは、この分野の研究の発展にとって計りしれない刺激となるばかりでなく、日頃国際会議に出席することの少ない多くの若手研究者の人材育成のためにも極めて有意義と考えられる。

	開催年	開催地	参加者数 (日本から)
第1回	1960	カナダ・ モントリオール	150 (3)
第2回	1983	カナダ モントリオール	160 (15)
第3回	1986	スイス・ チューリッヒ	230 (10)
第4回	1989	日本・京都	

種生物学会会則

1. (名称)

本会は種生物学会 (The Society for the Study of Species Biology) という。

2. (目的)

本会は植物の種生物学・進化生物学研究の発展・向上を図ることを目的とする。

3. (会員)

本会の趣旨に賛同し、会費を納入した者は会員となることができる。本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。

4. (事業)

本会は以下の事業を行なう。

1) 種生物学シンポジウムの開催。

2) Plant Species Biology そのほかの定期刊行物の刊行。

3) その他。

5. (財政)

会費・事業収入・寄付金等をもって会の運営にあてる。

本会の会計年度は1月1日より12月31日までとする。

6. (総会)

1) 本会は年1回総会を開催する。

2) 総会の決定は出席会員の過半数をもって行なう。

7 (会長)

会長は本会を代表し会務を統べる。会長は会員の互選によって定める。会長の任期は2年とする。但し重任を妨げない。

8. (幹事会)

1) 幹事会は会長と若干名の幹事で構成され、会の運営を行なう。幹事の任期は2年とする。但し重任を妨げない。

2) 幹事会は幹事候補を総会において推薦することができる。幹事の選出は総会出席会員の過半数をもって行なう。

3) 幹事会は常任幹事4名を互選する。常任幹事は庶務・会計・編集事務(2名)を分担する。

4) 幹事会は以下の事項を審議し総会に提案する。

総会はこれを審議・決定する。

a) 会の予算及び決算

b) 会則の変更

c) その他

5) 幹事会は種生物学シンポジウム準備委員会を委嘱する。委員の任期は1年とする。

9. (編集委員会)

1) 編集委員会は英文誌 (Plant Species Biology) ・和文誌 (種生物学研究) 各編集委員会をおく。

2) 各編集委員会は編集幹事ならびに編集委員で構成する。編集委員会は編集委員長を互選する。

3) 各編集委員は前任編集委員会の協議によって選出し会長が委嘱する。編集委員の任期は3年とする。但し重任を妨げない。

10. (会計監査)

- 1) 本会は2名の会計監査委員をおく。会計監査委員の任期は2年とする。但し重任を妨げない。
- 2) 幹事会は会計監査委員候補を選出し総会に提案することができる。会計監査委員の選出は総会出席会員の過半数の承認をもって行なう。
- 3) 会長は会計年度間の収支決算を次の総会に報告してその承認を受けなければならない。

附則

会員の会費は前納とする。会費年額は総会で決定する。

本会則は1987年2月から適用される。

種生物学研究投稿規程

1. 種生物学研究は種生物学研究会が年1回発行する機関誌であり、生物（主として植物）の種生物学・進化生物学に関する総説、短評、書評、意見など、および本会記事を掲載する。投稿原稿は全て日本語とする。
2. 総説は関連する文献をできるだけ広く引用し、かつ著者なりの主張と論理にもとづいてまとめられた記事、短評は特定の問題に関する仮説や解釈の問題点を要領よく整理し、著者なりの視点を明示した記事とし、それぞれ刷りあがり14ページ、および8ページ以内とする。
3. 投稿原稿は別に定める執筆要綱に従って準備し、本文・図表の正本1部、コピー1部を編集委員会あてに送付すること。
4. 投稿原稿は原則として編集委員複数名によるレビューを受ける。編集委員会が必要と判断した場合には、編集委員以外の者にレビューを依頼することがある。レビューの結果著者による原稿の修正が必要と判断された場合には、原稿に問題点を記して投稿者に返却する。
5. 編集委員がその記事の掲載を可とし、編集委員長がそれを認めた日付をもって、その論文の受理の日付とする。
6. 掲載原稿は表現の明確化と表記の統一のために執筆要綱にもとづいて編集委員が字句上の修正を行なうことがある。投稿者は著者校正の段階で編集委員

による修正に異議を申し立てることができる。異議申し立てがあった場合には、原則として表現・表記は原文にもどされる。

7. 総説・短評中に未発表の図表を用いる場合には未発表であることを明記すること。種生物学研究会は原著論文発表に際してこれらの図表を他の学術雑誌に転載することを一切制限しない。
8. 他の学術雑誌・学術書に発表された図表を総説・短評中に転載する場合には、出版元の学会・出版社に許可を取り、許可に対する謝辞を記すること。転載許可申請に際しては、編集委員会に申し出れば編集委員会名の書状を利用することができる。
9. 総説・短評の著者は30部の別刷を無料で受けとることができる。30部をこえて別刷を必要とする場合には超過分の実費は著者負担とする。
10. この規定は種生物学研究第12号（1987）に掲載される記事から適用する。この規定の改訂は種生物学研究会編集委員会の議を経て、幹事会の承認を得て行なう。

種生物学研究執筆要綱

1. 横書き原稿用紙を用いること。
2. 印刷は横書き2列組み（1列は25字×48行=2800字）であり、1ページが400字詰原稿用紙6枚分にあたる。この数字を目安として、刷り上がり制限ページ以内に原稿を準備すること。
3. 図はページ幅か1/2ページ幅の縮小率を想定して準備すること。レタリングが小さすぎるために1/2ページ幅の縮小ができず、やむをえず2/3ページ幅を使うことがあるがこのようなことはできるだけ避けること。図の性格上とくに2/3ページ幅を希望する場合には原図に赤で指示を書きこむこと。コピーを原図に用いる場合は鮮明なものを用意すること。
4. 文書はだ・である調とする。
5. 植物名は和名がある場合には和名を用い、初出の箇所のみ学名を並記すること。
6. 文献の引用は和文論文の場合には漢字書き、欧文論文の場合にはローマ字書きとする。
7. 数詞としての数字にはアラビア数字を用い、熟語

の一部の場合には漢字を使うこと。

＜例＞ 1つ 2部体 3種 4月 5時間 etc.
一部 同一種 単一の もう一つの 一般
に etc.

8. 和文誌のため原則として術語は日本語を用いること。ただし、日本語のあとに英語を付記してもよい。

＜例＞ × reproductive efficiency を計算すると

- 再生産効率を計算すると
- 再生産効率 reproductive efficiency を計算すると

9. 副詞・接続詞・指示代名詞は原則としてひらがな表記とする。

＜例＞ 或る→ある 我が国→わが国 多分→たぶん 大変→たいへん 即ち→すなわち 先ず→まず この様に→このように etc.

10. 図の説明は和文とする。欧文論文から転載する場合には必ず説明文を訳すこと。図の説明は図とは別に原稿用紙に記すこと。ただし本文とは別の用紙に記し、本文のあとにそえること。図の説明は簡潔なタイトルと記号等の説明に分けて構成すること。後者は1ポイント小さな活字で印刷される。

図の記号等の説明は次の例にならうこと。

＜例＞ a : 1葉段階 b : 3葉段階 ● : 茎が1本の個体 ○ : 茎が2本の個体 ★ : 茎が3本の個体

11. 引用文献は欧文・和文こみのアルファベット順とし、欧文論文は欧文で、和文論文は和文で引用すること。共著論文は単著論文のあとにまとめること。引用形式は下記の例にならうこと

欧文論文

Harper, J. L. & J. Ogden. 1970. The reproductive strategy of higher plants 1. The concept of strategy with special reference to *Senecio vulgaris* L. J. Ecol. 58 : 681-689.

McArthur, H. H. & E. O. Wilson. 1967. The Theory of Island Biogeography. Princeton Univ. Press, Princeton.

Foster, R. B. 1980. Heterogeneity and disturba-

nce in tropical vegetation. In : M. E. Soulé & B. A. Wilcox (eds.), Conservation Biology p. 75 - 92, Sinauer Associates, Sunderland.

和文論文

初島住彦 1969 ツクシアカツツジ節の再検 横須賀博報告 15 : 17-23.

北村四郎・村田源・小山鉄夫 1964 原色日本植物図鑑草本編(下) p. 369 - 399. 保育社

遠藤徹 1977 アイソザイム 林孝三(編) 核酸と生合成産物(植物遺伝学 II) p. 251 - 289. 裳華房

* 日本の出版社については所在地の記載は不要。

Plant Species Biology 投稿規定

Plant Species Biology は種生物学研究会により年2回発行される。Plant Species Biology は植物の進化生物学(集団生物学・進化生態学・系統学および共進化をはじめ関連する生物学諸領域)に関する原著論文と短報・意見(notes and comments)を掲載する。投稿者は会員であることが望ましい。また編集委員会の依頼による招待記事を掲載することがある。投稿論文は進化生物学的事実・過程・機構および概念に関する経験的・理論的研究に基づく新しい結果を含んだものに限る。また投稿論文は他の出版物に印刷あるいは受理されていないものに限る。

投稿原稿は全て英語とする。単位はメートル法を用いること。原著論文は刷りあがり10ページ以内、短報・意見は2ページ以内とする。この制限を超過した場合、1ページにつき10,000円の超過料金を徴収する。カラー図版に要する費用は著者負担とする。投稿原稿は受付後すみやかに2名の審査委員に送付される。

原稿はA4版(約21×30cm)タイプ用紙にダブルスペースでタイプすること。原本1部を含む3部を送付すること。用紙の上端は3cm、左右下端は2.5cmあけること。原稿の構成は以下の順序とする：

表題ページ、要旨、本文(序論、材料と方法、結果、考察)、引用文献、表、図の説明、図。

短報・意見では要旨を省略すること。

1. 表題ページには表題、著者名、住所、字間を含め40字以内の見出し (running head) を記すこと。
2. 要旨は250語以内とし、わかりやすく簡潔でかつ本文を参照せずによく理解できるものにする。要旨につづけて5語以内のキーワードを記すこと。
3. 本文。謝辞は本文の末尾に記すこと。学名およびギリシャ文字・ローマ文字の定数・変数を除きアンダーラインを使用しないこと。脚注を用いないこと。
4. 引用文献。本文で引用した全ての文献を第一著者のアルファベット順に列記すること。本文とは別の用紙にダブルスペースでタイプすること。引用は下記の例に従い、記入もれが無いようにすること。

雑誌：

- Brown, B. A. and Clegg, M. T. 1984. Influence of flower color polymorphism on genetic transmission in a natural population of the common morning glory, *Ipomoea purpurea*. *Evolution* 38 : 796-803.
- Noshiro, S. 1984. Variations of *Quercus mongolica* var. *undulatifolia* and var. *grosse-serrata* on Mt. Makihata, Central Japan. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 32 : 116-126 (in Japanese with English summary).

単行本：

- Odum, E. P. 1971. *Fundamentals of Ecology*, 3rd ed. 574pp. W. B. Saunders, Philadelphia.

単行本中の章：

- Kawano, S. 1985. Life history characteristics

of temperate woodland plants in Japan.

In: White, J. (ed.), *The Population Structure of Vegetation*, 515-549. Dr. W. Junk Publishers, Dordrecht.

雑誌名の略記法は World List of Scientific Periodicals の最新版に従うこと。

5. 表。ダブルスペースでタイプし、上端に短い表題をつけること。表の番号はアラビア数字を用いること。ケイ線は最少限にとどめること。できるだけスペースをとらないよう編集すること。
6. 図。審査用に各図のコピー3部を用意し、さらに製版用に適した白色の台紙に貼付した原図(写真を含む)を送付すること。写真は光沢平滑印画紙に焼きつけること。図の説明は本文とは別にまとめ、ダブルスペースでタイプすること。図の番号はアラビア数字を用いること。1ページ大に印刷される大きさ(14×21cm)をよく考慮し、できるだけスペースをとらないよう編集すること。各図の上端欄外に図の番号と著者名を書くこと。

校正と別刷：

別刷の注文票とともに、初校を著者に送付する。校正時における原稿の内容上の修正は行なわないこと。原稿を修正した場合印刷が遅れることがある。また組み直しの費用は著者に請求される。初校は別刷の注文票とともにすみやかに編集委員会に返送すること。別刷30部は無料である。30部をこえる別刷の費用は自己負担とする。別刷の価格表は注文票に添付される。

この規定の改訂は種生物学研究会編集委員会の議を経て、幹事の承認を得て行なう。